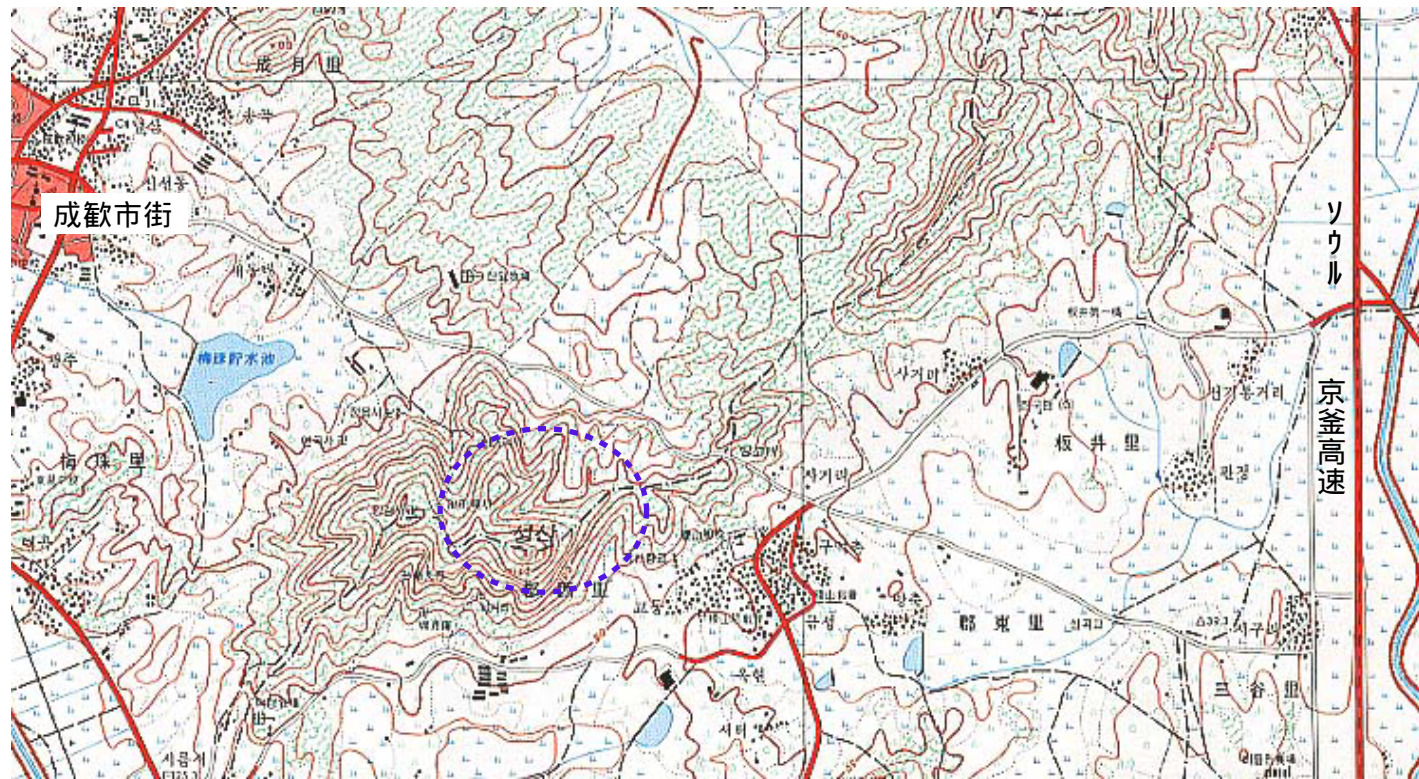
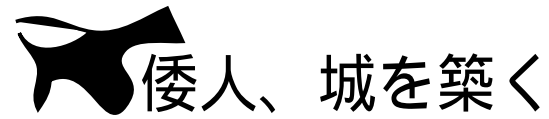


倭人の城は「倭城」だけか



蛇山城（点線のある山）の位置図（1/25000地形図No.161-4「成歓」1987測量より；上が北）
が城山（ソンサン）の山頂

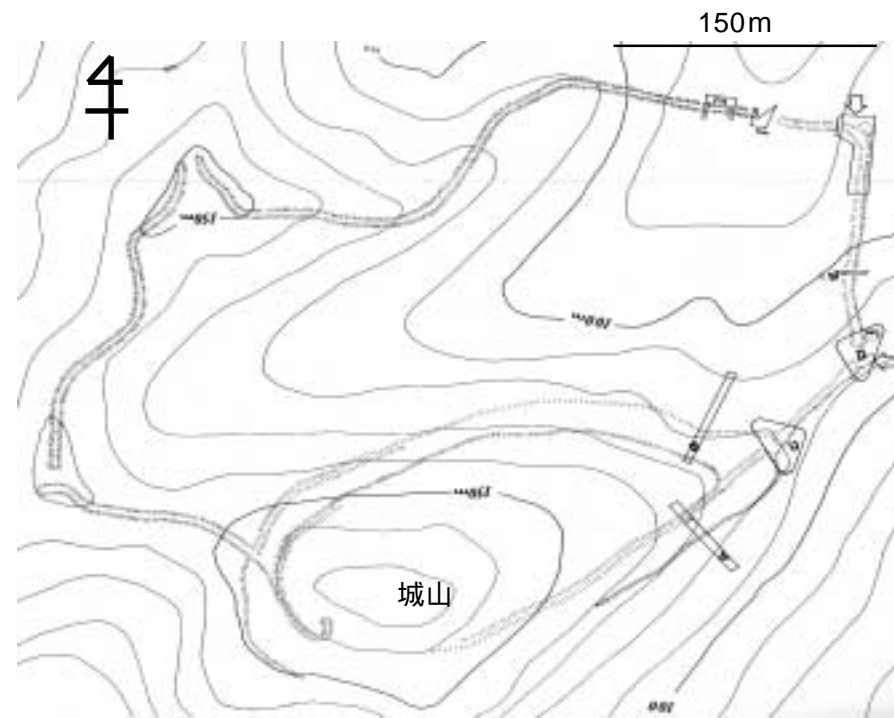
慶長2（1597）年9月、黒田長政の軍隊は全羅道より漢城へ向かうべく、「全義館」へ兵を進めた。対する明軍は漢城防衛のため、水原（スウォン）と稷山（チクサン）を拠点に日本軍の襲来に備えていた。そして両軍は稷山で激突した。

『黒田家譜』では、この稷山の戦いの様子について記している。この時の布陣について同書は、「（副總兵）解生八西山の高き所に陣を取、前に二三里四方の原ありけるに敵充満せり」「後藤又兵衛らがいそぎ馳行き、切通のごとくなる所を通りぬけ、先を見やりけるに、むかひの山邊に敵何万騎ともしらず、夥しき大軍にて陣をはり、山下の原に五六千ほと別におり立て、其先陣は岸高き川に土橋有しを此方へ越んとしける所に」などと記している。結果的に黒田軍は敗退し、毛利秀元の軍に救援されたのであった。

この戦いで戦場となったのは現在残る地名から推測して安市（チョナンシ）稷山面とその周辺とみられる。忠清南道、同北道、京畿道（キョングド）の3道の境界に近く、三国時代にあって争奪の地となった履歴をもっている。

本号ではその稷山面と成歓面（ソンホンミョン）の境界に所在する蛇山城について紹介してみたい。

<参考> 東潮・田中俊明『韓国の古代遺跡2 百濟、伽耶篇』中央公論社、1989



蛇山城の遺構図

全体の縄張りとしては、山頂部分を巡る城壁（鉢巻式）と、谷部を閉塞するために標高を下って巡る城壁（包谷式）の2タイプが複合する特徴を見せている。山頂を巡る城壁では、北側で2重になっている箇所もある。踏査して気づくのは、山頂を巡る城壁の内側、すなわち城内の谷に面する斜面では、山頂にむかってテラス状の削平地が存在していることである。日本の中世城郭を想起させる風景が展開していた。城内部分の発掘調査は行われていないため、この削平地が城郭に伴う遺構かどうか不明である。

注；倭城築城時、邑城を利用した可能性が指摘されている（多田暢久「旧邑城内の日本式石垣」『倭城の研究』創刊号、1997所収）。



左の写真は西側の城門遺構である。土塁が切れて「虎口」状になっている（遺構図参照）。調査された北東隅では、石築の雉が出土しているが、こちらについては未調査なので不明。北東隅の城門跡とは異なり、食い違い状になっていた可能性がありそうだ。右の写真は北側の城門跡から城内を見たところ。内部に向かって標高が下り、広場になっている。テラス状の段があったようにも見えた。2つの門跡が北東隅の城門と異なるのは、尾根の頂上に位置していることである。確実な根拠があるわけではないが、「古代山城っぽくない」という印象を踏査中に感じた。

この山城遺跡が文禄・慶長の役の舞台になったかどうかは明確に答えるだけの材料を現在持っていない。しかし、この周辺で激戦が展開された可能性は非常に高く、地理的に日、朝・明いずれにとってもなんらかの軍事施設が築かれてもおかしくはない。その際、郭再祐が火旺山城に籠ったように、前代の城郭を利用することは十分にありうる（注）。

韓国における古代山城研究に際しては、かかる視点をもって調査することも日本人研究者には必要になってくるのだろう。

<参考> 成周鐸・車勇杰『稷山蛇山城』百濟文化開発研究院、1994



"Shiro Fumi" No.22 The News of Himeji Center for Research into Castles and Fortifications.